

# 琉球大学学術リポジトリ

[書評] 島村幸一(SHIMAMURA  
Kōichi)著 『『おもろさうし』と琉球文学』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 波照間, 永吉, Hateruma, Eikichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/33990">http://hdl.handle.net/20.500.12000/33990</a>

## [書評]

島村 幸一 (SHIMAMURA Kōichi) 著

『『おもろさうし』と琉球文学』

笠間書院刊(東京) 2010年3月 796頁

波照間 永吉 (HATERUMA Eikichi)

### 1. はじめに——本書の構成

30年余におよぶ著者の『おもろさうし』を中心とする琉球文学研究の集大成で、780頁(参考文献・索引含む)の大冊である。読者はこの分量と各論考の念入りな記述に圧倒され、格闘を余儀なくされるだろう。しかし、格闘するに十分な価値のある書物と言って良い。まず本書の構成についてざっとみてみよう。

本書は3部から構成される。まず第1部は「『おもろさうし』の研究」で、構成は第1編「オモロの解説論」、第2編「オモロのテキスト論」、第3編「オモロの担い手論」、第4編「オモロの表現論」、第5編「『おもろさうし』と『混効験集』」の5編からなる。次いで第2部は「歌謡研究」で、第1編「長詞形歌謡の研究」、第2編「短詞形歌謡、琉歌の研究」の2編。第3部は「琉球文学の研究概観・琉球文学研究史」で、第1章「琉球文学の研究概観」、第2章「琉球文学研究史」から成っている。大雑把に言うと、『おもろさうし』、南島歌謡、琉球文学研究史の三分野の論文で構成されているわけである。

第1部は、本書の約7割、528頁を占める。これは本書のタイトルに『おもろさうし』を掲げていることに端的に表れているように、本書の中心——すなわち著者のこの間の研究が『おもろさうし』を中心にして展開されたことを物語っている。著者は『おもろさうし』という文献とオモロという歌謡の正体を明らかにするための仕事に、長い時間と情熱を傾注してきたのである。こうして書き上げられた論文は17本。これを「解説論」「テキスト論」「担い手論」「表現論」「『おもろさうし』と『混効験集』」論として編み上げ、『おもろさうし』とオモロの“正体”に迫ろうとした。第1編の「解説論」には6本の論文が収録され、著者が特に力を注いできたことをうかがわせる。事実、個々の論文としても充実しているといつてよい。第2編の「テキスト論」では尚家本・仲吉本・田島本『おもろさうし』などをもとに、現存の『おもろさうし』がどのような性格の文献であるかを解明している。そして第3編の「担い手論」では、神女とオモロ歌唱者を中心に、王府祭祀におけるオモロの担い手の問題を論じる。第4編では「表現論」を展開し、個々のオモロの終末部の表現、オモロの美称語、オモロと〈生産叙事〉などについて論じている。第5編は『混効験集』という文献の性格、『おもろさうし』の「言葉聞書」と『混効験集』の関係について論じている。

第2部は「歌謡研究」という表題がついているが、ここでいう「歌謡」は、オモロ以外の南島歌謡をいい、奄美・沖縄・宮古・八重山に伝承されてきた諸歌謡(書評子の分類では祭祀歌謡・儀礼歌謡・労作歌謡・遊戯歌謡)をさす。これを「長詩形歌謡」と「短詩形歌謡」の二つにわけ、第1編に前者に関する論文3本、第2編に後者に関する論文2本の計5本を収録する。本書におけるその分量は約160頁余である。

第3部は編の構成はなく、「研究概観」と「研究史」の2章からなっており、前者の「概観」を

承けて、後者では「概説的な研究／古謡／オモロ／短詩型歌謡／組踊」のジャンルに分けて研究史を解説している。

## 2. 著者の方法と記述

### (1) 著者の記述の特徴——重層をなす論理展開と記述

本書全体の価値を一口で言うと、現在の『おもしろさうし』とオモロ研究の水準を示すものと言ってよいだろう。個々の論文の内容はおろか、その表題を掲げることさえも紙幅の都合で叶わないので、一部をとりあげて論評してみたい。

第1部収録の論文は『おもしろさうし』とオモロをめぐる現在の研究の問題点に鋭く迫った論考であると言ってよい。いずれの論考ともに文献資料を博捜し、幾つもの視点を設定し問題に迫っていく。そのありようは、重厚であり、著者の研究への執念を感じさせるに充分である。そして、その至った結論も説得的であり、了解できることが多い。これらの仕事は『おもしろさうし』という文献に密着し、個々のオモロを語のレベルにまで降りて全用例を洗い出し、テーマに関わりのある周辺史料にまで調査の手を広げた研究の所産である。その具体的な姿を第5章を例としてみてもみよう。

第5章「『地方』で謡われたオモロ、久米島オモロの特殊性」は、オモロが「久米島で具体的に謡われることを示し、久米島の神女、君南風の性格を明らかにして、『境界』の島である一面を持つ久米島の地政学的位置を論じて、王権歌謡としての久米島オモロの性格や、王権にとっての久米島の位置付けを考察し」（ii頁）たものであるが、実に多数の歴史書・家譜、研究論文を引き、新しい見解を提示している。その論理の展開は複雑に入り組み、決して分かりやすいものではないが、問題点を洗い出し、資料をもとに迫っていくさまは緻密といえる。これが著者の論述の基本的なスタイルである。以下、論の展開を追いながら要約してみる。

まず「はじめに」で、三山統一後の首里王府が今帰仁・北山監守派遣に際し『おもしろさうし』一冊と「唄勢頭三四人」の他、高級神女を付け「祭祀を行わせた」こと、それが「この地域に王府の祭祀を持ち込み宗教的に支配しようとしたこと」（140頁）によるものであることをのべる。

そして、第1節「久米島で謡われたオモロ」で『君南風由来并位階且公事』を引いて、「稲大祭之時」の祭儀での「備」の存在から久米島でも「稲二祭」にはオモロが謡われていたことを推測する。そして、そのオモロがどのようなものであったかを『おもしろさうし』と前掲の君南風関係資料を使って突き止める作業を行い、「おもしろ赤頭」達が「仲里城祭礼之時おもしろ」を「謡ったことになろう」（147頁）とする。さらに、先の「備」に「刀／木鑓」が見えることから、『琉球国由来記』の首里城の正月儀礼で「勢頭部役」が「長刀」を持って控えるという記事を引き、これが『図帳 當方』にも確認されること。そして、それは「この儀礼の場においてオモロを謡っていたことを物語っている」とし、「仲里城」における稲の祭礼が「刀／鑓」の存在も含めて、「これは『地方』が王権の儀礼を模したのであり、場を変えながらも王権儀礼が『地方』に持ち込まれていることを物語っているのではないか」（148頁）と推論する。そして、「『地方』でオモロが謡われた痕跡を残す史料が、北山（今帰仁）と久米島であることは（中略）、首里王府の王権がおよぶ境界的な場所であったからなのではないか。だからこそ、ここにオモロが謡われる王権儀礼があったと考えられないか」（148頁）と、境界論的な視点から一つの結論を提示するのである。

第2節「『八重山征伐』を謡った君南風のオモロ」では巻21-1413オモロを例示し、これが巻1-36などと深く関わるものであり、このことは巻21の成立にも「無視できない事柄」であるという見解を導きとして、君南風の“八重山遠征”が史実であるか否かの検討に入る。まず、泊の大阿

母の由来譚を引いたり、君南風と首里弁が嶽・八重山オモト嶽の神との姉妹関係を説く神話を引いたり、さらには『久米仲里間切公事帳』『大宰府神社蔵『琉球国図』』を示し、久米島が宮古・八重山との関係の窓口としてあったことを確認する。そして、伊波普猷・仲原善忠以来の通説——君南風の八重山渡航は“女は戦の魁”という考えによるものとする——の検討に入る。著者がそこで至った結論は「君南風の『八重山渡海』は、(中略)君南風の航海の守護神として役割であったと考えた方がよいのではないか」(156頁)とするものである。この結論はさしずめ、第2章「オモロにみる兄妹の紐帯——琉球弧のヲナリ神——」で提示された結論、すなわち、「君々は国王のヲナリ神であり、国王を守護した神女であった」(165頁)の、君南風における確認ということでもある。

第3節「神女、君南風の性格」は、前節の結論、即ち、君南風の渡海は「航海の守護神」としてのものであったことを「巡行叙事」の観点から確認しようとする。そして「ノロや君々の基本的な役割のひとつは、航海の守護神としての役割が重要であったのではないか」(159頁)という眼目たる結論を提示し、これを『八重山嶽々由来記』『宮古島旧記』を使って八重山島大阿母・宮古島大阿母の職務においても確認する。その後、「君々は国王のヲナリ神」(165頁)というシェーマに従って、なぜ君南風がその君々に位置づけられたかを『君南風由来并位階且公事』、辞令書、「和州氏家譜系図」などを使って解く。こうして「君南風は在地の神女が昇格して成ったというより、王府から招来された外来神であった」(167頁)という結論に至る。

最後に「まとめ」の節で「地方オモロ」としての久米島オモロの特殊性を開示するが、その特殊性は「首里の王権儀礼が君南風の主宰する祭祀に持ち込まれ」たことに由来するものであり、また、「久米島のオモロは地方オモロとしては特異な側面」をもつ、ということである。後者の論証にはオモロ語の使用例などがあげられ、けして分かりやすいものではない。しかもその結論が「一般名詞と理解される語が久米島のオモロのみに出てくるのは、久米島のオモロが中央のオモロと違った独自の世界を持った巻であるという解釈が成り立つだろう」と言うのは、これまで著者が提示した王府における王権祭儀の久米島への招来、という結論と対立している。この点については著者も二つの解釈によって整合性を模索するが、解決されないまま、「課題とするほかない」(175頁)として論考を閉じる。

## (2) 琉球文学研究の正統に連なる

著者の周到な論考の形を辿ってみた。上に述べたことを改めて解説するゆとりはないが、本論考は「ノロや君々の基本的な役割のひとつは、航海の守護神としての役割が重要であった」というところに基盤を置いており、その視点で捉えた君南風論であり久米島オモロ論である、と言える。著者は先ず最初に、今帰仁と久米島が王国の境界的地域であり、それゆえに王権祭儀が招来されたことを言う。次いで、君南風の八重山渡海の原因を“女は戦の魁”とする通説を否定し、航海守護神としての渡海であったことを述べる。そして、君南風の在地性を否定し、「王府からの招来された外来神」とする新しい考えを提示する。

オモロの用例に忠実でありながら、周辺史料を駆使して、通説の殻を破って新しい見解を提示しているのはみたとおりである。その方法論は、著者が学生時代から師事し、敬愛する池宮正治教授の教えを正統に受け継いだものである。本書はその意味で、伊波普猷から始まり外間守善氏に受け継がれ、池宮正治氏によって精密化された琉球文学研究における文献中心の研究の学統に連なるものといつてよいだろう。今はなき嘉手苺千鶴子氏の研究もまたその流れに属するものであった。著者が池宮正治教授や嘉手苺千鶴子氏の達成を基盤に研究を展開してきたことは、本書

収録の論文のなかで、池宮・嘉手苅両氏の言説が幾度も引用・提示されていることから知られるし、「あとがき」にも示されているように、著者の問題意識の幾つかは池宮氏とのやりとりによって醸成されたものである。著者の方法論とそれによる達成を、関根賢司氏は「王道というべき渾身の著述」とした(『週間読書人』2010年6月11日号)。本書は、池宮正治氏によって導かれた「琉球文学の方法」(池宮氏の著書名)による一つの到達点と言える。

### 3. 本書の達成と課題

#### (1) オモロと『おもろさうし』をめぐる文化状況の全体像は如何に

さて、書評子は以上のような評価をなすものであるが、以下、本書の提示した見解について書評子の関心に従って二、三のことについて触れてみたい。

まず、このようにして提出された諸論考によって、著者はどのような世界を描き出そうとしたのであろうか。曲解していることを恐れるのであるが、書評子の理解をつなぎ合わせていくと次のようになる。

まず、首里王府においてオモロを担う存在は神女とオモロ歌唱者であり、彼らのオモロ歌唱の場は異なるものであった。すなわち、神女たちは王宮の奥深く、神の来臨するケオノウチに代表される聖域での祭祀でオモロを謡い、その後、オモロ歌唱者たちは王を王城の正殿に迎え、その前でオモロを歌唱する。そして、神女のオモロと歌唱者のオモロには必ずと内容上の違いがあった。一方、今帰仁や久米島など王国の境界的な地域にあっては王権儀礼が招来され、首里からの外来神によって祭儀が行われ、オモロが謡われていた。そのうち、久米島では君南風が航海守護神として機能し、尚真王の八重山討伐のための航海、王府の貿易事業にかかる航海などに関わった。王府の君々は国王のヲナリ神であり、彼らの主要な役割は航海守護にあった。

オモロはその後も神聖性を保持し続け、薩摩の侵攻という国家の危難に際しても王府はその力に頼る部分を存していた。しかし、薩摩支配下、羽地朝秀に代表される権力によって古琉球的制度の改革が進められ、神女の担うオモロは王府の儀礼から姿を消す。更に時代が下るとオモロ主取以下の男性官人歌唱者の担うオモロも数を失うようになる。そんな中、1709年、首里城の回祿により『おもろさうし』が消失する。王府は、既に編纂事業を進めていた『混効験集』のスタッフを動員して『おもろさうし』の再編纂に着手し、1710年に再編纂は完了する。その時、王府のオモロ管掌者である安仁屋家の本にはオモロ原注が記入された。オモロ原注と『混効験集』の語注の間に相当な重なりをみるのはそのためである。

このように描き出される古琉球の琉球国の祭儀とオモロの姿、そして薩摩入り後から18世紀初葉の王府の文化的状況は、第2部の「儀礼歌としての琉歌」「疱瘡歌の系譜」などによって、さらに具体的場面を追加される。すなわち、公事オモロと歌三線を伴う琉歌の並存状況と、新しい文化としての大和文化の流入＝疱瘡歌の到来などがあったということである。

まずは、このような文化状況を描き出してくれたものと思う。惜しむらくは、著者自らがそのまともをしてきていないことである。「古琉球」とは何か、という大きな問題と本書の個々のテーマが無縁であるはずはない。著者の描き出す古琉球世界の全体像を見たいと思うのは書評子だけではないだろう。著者自らの示す古琉球像によって本書に対する評価と議論はもっと深まるものと思う。一つの欠落である。

#### (2) 各論への若干の疑問

第1部の第2章「オモロにみる兄妹の紐帯——琉球弧のヲナリ神——」は「オモロの信仰的な

基盤をなしていると考えられる琉球弧のヲナリ神信仰を考察した論（i 頁）である。その一つの結論として著者は「ヲナリの霊的優位が、現実には琉球弧全体においては様々な場面にみられるわけではなく、航海に関する場面に強くあらわれる」（64 頁）としている。しかし、文学の場面とは別に、ヲナリ神信仰は本書 43 頁で例示するように、生産や通過儀礼を含めて一般に存在する、とするのが書評子の生活実感であり、民俗としての妥当性でもあるように思う。また、「それ（ヲナリ神信仰におけるヲナリ——書評子注）が妻ではなく、性を別とする兄妹の間で霊的な守護・被守護の関係になっているのが、ヲナリ神の特徴である」（64 頁）とするが、これについては第四章で「尚寧のヲナリ神」として「前王尚永に関わる『王家』の女性たち」（124 頁）を考えていることとどのように整合するであろうか。さらには、「君々は国王のヲナリ神であり、国王を守護した神女であった」（165 頁）という場合のヲナリ神は、「性を別とする兄妹」という規定を充足するものであろうか。ヲナリ神については、姉妹に限らず妻や叔母などの女性に広げて考えるべきとする仲松弥秀らの見解もあるし、原理と変種・応用（バリエーション）、擬制という観点上の問題かもしれないが、少々分かりにくいし、一面的な気がする。

第 3 章「『ありき糸とオモロ』と『船糸とオモロ』——『おもしろさうし』第十と第十三——」は『おもしろさうし』巻十と巻十三「両巻のオモロの違いを明らかにしようとした」（i 頁）もので、仲原善忠以来の通説を、「巡行叙事」という観点から再検討している。結論については了解できるが、問題は提示した仮説を今後どのように実証していくかであろう。本書に収録された諸論考はデスクワークによるものである。仮説の実証の場面として、フィールドを求めていくことが要請されているのではなかろうか。

第 5 章は上にみたように周到に組み上げられた論考である。書評子自身の蒙も啓いてもらったが、なお、十全に理解できない部分もある。例えば、今帰仁と久米島の境界的な地位とオモロの関係をめぐる評価についてである。つまり、「王権儀礼」とオモロはこれらの地域以外にはみられないものだろうか。これは久高島の祭儀と王府祭儀をめぐる問題につながり、あるいは「仲里城祭礼之時おもしろ」にみられるようなオモロの伝承とみられる例は他の地域にはないのかという疑問につながっている。また君南風の八重山渡海についての通説の否定と、航海守護神としての神女の乗船・航海ということが資・史的に証明されるか、ということもある。そして、君南風の在地性の問題である。これはオモロ研究のみの問題ではなく、琉球国における神と神女の問題でもある。今後、歴史学・民俗学などをふくめて議論すべきことであろう。意味のある問題提起と受け止めたい。

もう一つ重要なことがある。それは第 4 編「オモロの表現論」の第 3 章「オモロの表現——〈生産叙事〉の視点から——」で述べられた、オモロを「第二節だけのウタが全体の半数を占める等、叙事的な歌謡にあって極めて短形化が進んだウタ」（434 頁）とし、「オモロは（中略）当初から短い表現のウタとしてあった」（434 頁）とする点である。これはかつて外間守善氏が、二節からなるオモロを「オモロ形式」とし、その特徴を「歌形が短く構造化している」（『おもしろ概説』『日本思想大系 18 おもしろさうし』1972 年）としたことと重なる点がありそうに思える。外間守善氏はこれをさらに「短く緊張的な歌形」という言葉によって抒情詩の発生へつなげたのであるが（『南島文学論』1995 年）、著者はこの「短い表現のウタ」（オモロ）をオモロと南島歌謡のなかにどのように位置づけるのだろうか。著者の見解と外間氏のそれとは“似て非なるもの”であろう。しかし、形式面のこととは言え、「先祖返り」にも似た、著者と外間氏の見解の示すこの微妙な類似（著者はこのことには触れていない）は意外であり、見過ごせない。この“短い形式のオモロ”の問題は、今後の重要な論点になるものと思っている。

### (3) 今後の課題——議論の深まりを

最後に、蛇足がましいことではあるが、一、二、気がついたことがあるので書き添えておきたい。

本書の研究は文献研究に徹したものである。ひたすらなるデスクワークの結果であり、デスクワークの展開の上でフィールドの事象を援用して論を補強するということがほとんど行われていない。その徹底した姿勢はいつそ潔いほどである。しかし、琉球文学研究を深化させるためには、祭祀の現場や歌唱の実態を観察し、これを文学研究に投影させる必要がある。これが故玉城政美氏や書評子らがこの30年の間取り組んできたことでもある。玉城政美氏が開拓した歌形論・歌唱法の問題は、今後のオモロの解釈研究上重要な手段となるはずである。その方法論は祭祀を中心としたフィールド——歌謡の現場と生きて歌われている歌謡の調査によって拓かれて来たものである。

山下欣一氏に代表されるシャーマニズムと説話研究もしかりである。著者自身、「シャーマニズムの視点」を問題としている(外間守善氏の研究に対する評言)が、本書の論文の中でそれを用いた具体的な論述はない。これは、玉城政美氏や書評子などが展開してきた“神と神女”をめぐる問題(玉城政美「琉球の儀礼歌謡」(1999)、拙稿「『おもろさうし』の憑霊表現——サシブ・ムツキを中心とした予備的考察——」(1986)など)、即ち、本書のいう「オモロの担い手論」に直結する事柄である。例えば「『おもろさうし』の神女」における「神」と「神女」という用語の使用に、著者がどれほど注意をはらったものか知りたいと思う。本書中には「ノロ等の神のこと」(310頁)、「『首里大君』は高級神女の一神」(324頁)、「神女が男性的な人物の為に(「おより」)降臨する(「おれる」)、もしくはセヂを降ろす」(327頁)、「神女を神迎えする」(422頁)、「神女が海上彼方の彼岸の世界へ赴く」(585頁)などのように、書評子からすると「神」と「神女」についてあまり注意がはられていないような表現例がみられるのである。オモロの解釈上、この「神・神格・神女」の問題はいずれ避けることのできない事柄としてあることを指摘しておきたい。

もうひとつ挙げたいのは、「生産叙事」「巡行叙事」という概念の使用である。これらは小野重朗氏の提起に古橋信孝氏らの日本古代文学研究者らが独自の視点を持ち込むことによって成立したものである。これを氏は『おもろさうし』と南島歌謡研究に逆移入した形である。ここに氏の独創性がどのような形で発揮されたか。その結論の一つが「短形生産叙事」(444頁)という理解であるが、これは上にみた問題をはらんでいる。著者はさらにこの考えを進めて「語レベルの〈生産叙事〉」(450頁)をいう。「語」のみで「叙事」が成立するものなのか、という素朴な疑問があって、書評子などには理解がむづかしい。このように「生産叙事」「巡行叙事」による論の展開などは、上でみた、古琉球から近世琉球における『おもろさうし』とオモロをとりまく大状況をとりだして提示するという立場を持ちえていないこととも絡んで、著者の研究の独創性を見る上で問題となろう。

また、疑問に思うことがある。それは、著者の文献調査が広範多岐にわたり、しかも精細でありながら、先行研究のいくつかについて触れていない点である。これには例えば、「露」をめぐる議論のなかで、玉城政美氏の「琉歌における〈露〉のモチーフ」(『文学』第57巻11号。1989年)への言及が「注」や参考文献でもなされていないこと。また、オモロ語などの解釈について『沖縄古語大辞典』(1995年)の成果が検討されていないこと。さらには『おもろさうし』の対句部と反復部の区画と記載法の問題をめぐる問題や、重複オモロをめぐる問題については書評子もすでに論考や資料集を公刊しているが、これらについても当該論文での言及がみられないことなどである(拙稿の幾つかについては第3部の中で取り上げられている)。これらは一体何に起因するの

『『おもろさうし』と琉球文学』

であろうか。あれほどに精細な仕事を成し得た著者が見落としたのであろうか。それともある意図に基づくものであろうか。本書を読む限りは知りえないことである。こんな小さなことで著者の仕事の客観性と評価が揺らぐことはないだろうが、上手の手から水が漏れた、ということかもしれない。

著者の琉球文学研究の目指すところは明確である。氏はそれを「琉球文学の日本文学への定位」(701頁)と言っている。琉球文学と日本文学との関係、これこそが根源的な問題である。書評子は先に「琉球文学の独自性と固有の文学史の構想」を目指すべきことを言ったことがある(「琉球文学にみる沖縄人の心性——琉球文学の固有性をめぐって——」『沖縄芸術の科学』第22号〈2010年3月。沖縄県立芸術大学附属研究所刊〉)。目指されるべきことは「日本文学への定位」なのか「独自の文学史の構想」なのか。いずれであるにしろ、これは研究主体の問題として大切な事柄である。個々の琉球文学の諸問題について議論を深めると同時に、研究主体の問題として問い続けなければならないことである。

ともあれ、本書は『おもろさうし』と琉球文学研究にとって里程標をなすものであり、今後の研究者にとって必読の一冊として存在するものであることを確認して筆を擱きたい。

(沖縄県立芸術大学)